
とあるループ監視者の悲劇

タクティカル

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

とあるループ監視者の悲劇

【Nコード】

N 6 6 4 3 M

【作者名】

タクティカル

【あらすじ】

俺は同じ一日をループしている。

監視者が言うには生きて明日を迎えるまで、俺は永遠にループするとか。

そんな話。

角を曲がる。

向こうの方から凄まじいスピードでスポーツカーが走ってくる。

道幅は狭い。

壁にピタリと張り付かないと衝突してしまうだろう。

では張り付くか？

張り付いて無様に見送るか？

——否。

「……クク」

思わず笑みが浮かぶ。

ああ、知らないんだろう。

あの車はこれから自らがどんな目に遭うかを。

この俺の手で、哀れなスクラップになる運命を。

「……カカカ」

道のと真ん中に立つ。

中腰になり、前傾姿勢になる。

迎え撃つはスポーツカー。

スポーツカー。

たかが、スポーツカーだ。

「たかがスポーツカー一つ、正面から押しつぶしてやるわっ！」

体に力を漲らせる。

手を前に。

前に突き出す。

迫ってくるスポーツカー。

俺は動かない。

——スポーツカーが目の前に

——運転手の啞然とした顔。

——半ば倒れ込む様に、体を押し出す！

「ずりやあああああああああああつ！……！！」

――衝撃。



「……ふう、いいファイトだった」
「馬鹿あああああー！！！」

何も無い真っ白な空間。

先ほどに死闘を思い出し、汗を拭っていると突然大声と共に頭を叩かれた。

頭を押さえながら、叩いた人物を見る。

金髪で妹と同じ年くらいの少女が目端に涙を溜めながらそこにいた。

「痛いな。何をするんだ」
「こっちの台詞ですよっ！ あなたは何をしてるんですかっ！」

怒っていらっしやる。

難しい年頃なのかもしれん。

「何って言われても……」

「何で意味分らないみたいな顔してるんです!？ さっきのアレですよ! 車に向かってタックル!」

ああ、アレのことか。

ふふ……アレはいい勝負だった。

まあ、負けてしまったが後悔はしていない。

「もう少し早めに構えるべきかな? いや、打点をもう少し下げるべきか?」

「そーいう問題じゃないです! 人は! 車には! 勝てません!」

「いや、手応えは掴んでるんだ」

「絶対に気のせいです!」

「よし、次はもう少しタイミングを早くするか」

「ムキーーーーー!!!!」

少女は地団太を踏み、近くの卓袱台をひっくり返した。

卓袱台の上のミカンやら、お茶やらが宙へ舞う。

床に落ちる瞬間にお茶をキャッチ。

一気に飲み干す。

……うまい！

「何なんですか貴方は！？ 真面目にやる気あるんですか！？ 生き返る気はあるんですか！？」

「そりゃあるさ」

俺だってまだ死にたくない。

色々やりたいことだってあったさ。

生き返るなら喜んで生き返るさ。

「だったら！ どーして3回に1回のペースで車に轢かれるんですか！？ 素直に避けて下さいよ！」

「だ、だって普通に避けるのに飽きてきたんだもん」

「もんとか可愛く言ってんじゃないですよ！ まだ家出たばかりですよ！？ 69回！ 69回の内の死亡原因の半分以上が最初の車に轢かれるってどーいうことですか！？ 前代未聞ですよ！？」

そんなに轢かれてたのか……。

奴との勝負も、そんなになるのか。

今でも自分を殺した相手とはいえ、不思議な愛情が湧いてきた。

「いやでも最初に比べて相手に与える損害もでかくなったと……」
「だから何ですか！？ 相手の車壊してあなたに何か得があるんですか！？」

「得とかじゃない。――負けたくない戦いが、そこにはあるんだ」

「馬鹿！ 馬鹿！ 馬鹿！ この大馬鹿あ！ もうやだあ……」

む、三角座りで俯いてしまった。

床に落ちたミカンを投擲してくる。

……ちよつと反省。

この子も何だかんだ長い間俺に付き合ってくれているんだ。

流石に車に惹かれてばかりの俺を見るのは忍びないのだろう。

「わ、分かったよ。うん、もうしない。無謀な戦いはもうしない」

「……ほんとですか」

「ほんとほんと。……たまにしかない」

ぼそり、と聞こえるか聞こえないかの声で付け足した。

いつかはあのスポーツカーを逆に吹き飛ばせるようになりたいなあ。

あと何回くらい繰り返せば俺はその高みまで上り詰めることができるのか。

涙を拭った少女が立ち上がる。

「じゃあ、チャレンジ再開ですね」

「おう」

「頑張ってくださいね、ほんとに」

「やー」

「お願いですから、車には気をつけてくださいね?」

「ういっしゅ」

少女の声を受けて俺は70回目の扉をくぐる。

さて、頑張って生き残るか！

「その為にはまずスポーツカーをデストロイしなきゃな！」

「だから破壊前提で考えるのやめて下さい！ 素直に避ければいいんですよ！」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6643m/>

とあるループ監視者の悲劇

2010年10月11日20時25分発行